

「バー・メッカ事件 正田昭さんのこと」

平松 俊彦

クリスマスの12月25日は、私の誕生日であり、洗礼を受けた日でもある。家族や近親、友人に全くカトリック教徒がなく、またカトリックの学校へ行ったこともない私が、40歳を過ぎてから洗礼を受けるに至ったのは、間違いなく心の中に正田昭さんが生きていたからに違いない。世代も異なり自分が5歳のときに死刑を執行され帰天した、「バー・メッカ事件」の正田さんと、無論私は直接の接触を持っていない。私は、正田さんのことを中学2年のときに読んだ加賀乙彦先生の「宣告」という小説で知った。文庫判で上下巻、およそ1,500ページの小説を4日くらいで、息も継がずに読み終えてしまった。おそらく私の読んだ小説の中で、最も印象深い1冊である。カトリックに入信しようと思ったとき、間違いなくこの小説、いわんや心の中で正田さんからの呼びかけがあったことは確かである。正田さんは天へあげられたが、その遺志はよい土地に蒔かれた種のように、私の心の中で立派に実を結んだのである。昔の出来事であり、もはや「バー・メッカ事件」のことが語られることも少なくなった。クリスマスが近づく冬の朝に処刑されていった、正田昭さん。毎年、この時期が来るとそのことを想わずにいられない。

事件発生から一審判決まで

一貫して死刑囚である彼のことを「正田昭さん」と書いてきたが、死刑囚は法律上未決囚であり、有期刑のように釈放ということがない。つまり「刑期を務め上げて」ということがないから、「刑が執行された瞬間」がそれに相当する。その意味で、正田さんは立派に罪を償ったのである。被害者である博多さんに対し私は眞福を祈っているし、全く他意はないことを述べさせていただく。

「バー・メッカ事件」が発生したのは、1953年7月27日。当時東京は新橋にあったバー・メッカのカウンターで飲んでいた男性客の肩口に、突然血がしたたり落ちてきた、という衝撃的な幕開けとなる。メッカの2階裏の押し入れを調べてみると、そこには血まみれの被害者があった。死体は無惨な状況であり、聞込から3人の共犯ということが判明した。実行犯であった正田さんは、3人のうちの1人として指名手配されたのである。

共犯は自首したりし、暫時逮捕された。しかし彼は約2月半逃亡し、京都に潜伏していたところ身柄を確保された。正田さんは、京都から夜行列車で東京に護送されたのだが、ここでひとつの不運があった。マスコミが慶応大学出身であり、大変な美男子でもあった正田さんのことを過熱報道したのである。当時は報道規制もなく、あとから述べるが自暴自棄になっていた正田さんは、そのとき余り反省を表さず、著しくうたかたの心証を悪くする結果となった。おまけに、役者を凌ぐほどの美貌。世の一部の女性たちは彼をヒーロー視し、彼もそれに手を振って応えるなどしたため、市井に対してのマイナス要因は加速した。

犯罪の動機は、遊興等に関する借金のためであり、情状酌量の余地は全くない。正田さん自身も「私は進んで破滅を求めている」などと謂い、一審公判の中、裁判の心証は、ますます悪化していく。一審地裁判決は、死刑。正田さんの自暴自棄は相変わらずだったが、そのときあの

伝説的なフランス人宣教師カンドウ神父に出会うのである。正田さんの母親は元々熱心なプロテスタントであり、通っていたプロテスタント教会の仲間が、カトリックのカンドウ神父を紹介したのである。教会一致運動は一過性のものではない。正田さんは、こうした信仰の後押しにより、はからずもカンドウ神父との知遇を得た。

正田さんは最初のうち反発もあったものの、カンドウ神父の人間としての懐の深さと、得々とよどみなく説かれるキリストの愛の真理に触れ、深く己の罪の赦しを請うことになった。被害者の冥福を祈る毎日。その生き様は、私のごときの未熟なキリスト教者には、想像を絶するものであり、かつ今だに貫徹は難しいと思える理想とするものであった。



逮捕直後の正田昭さん

高裁棄却から死刑判決まで

犯情は極めて悪いものの、3人の共謀罪であり、被害者が1名だったことを考えると、死刑判決は非常に重いものだったと謂うべきである。(共犯者は5～10年の有期刑) 逮捕から一審公判にかけ正田さんの態度も、当然のように悪影響を与えた。ところが、正田さんは、高裁での控訴審を向える過程においてカンドウ神父の献身的な

説教に、日を追うごと迷いを断ち切り、光の子として神のお示しになる道へ歩み始めるのであった。

こんな中で、正田さんを担当したのが、拘置所の精神科医師でもあった加賀乙彦先生である。初めのうち、加賀先生は、大阪で弁護士の子弟として生まれ、慶応大学まで出た正田さんが、なぜあのような猟奇的な犯罪に手を染め、なぜあのような自暴自棄の態度をとっていたのか、学者として興味があったようだ。

正田さんの犯罪の根底にあったのは、父親が幼い頃に没してしまい、その後かなり歳の離れた長兄から受けた、末期的な家庭内暴力からくる厭世。このことを知って、加賀先生は驚く。そうした背景を理解しつつ、今やカンドウ神父の薫陶を受け、深く前非を反省し、神に祈る正田さんに、加賀先生は感銘を覚えた。実はその後加賀先生ご自身が正田さんの影響で、カトリックの洗礼を受けることになるのである。くしくも加賀先生と正田さんとは同い年、これも神のお導きなのか。

加賀先生の「宣告」は、キリスト者としてのご自身の誇りであり、死していった正田さんへの痛切な鎮魂歌でもある。

東京高裁で控訴棄却。最高裁への上告の間、正田さんは、カンドウ神父の死という試練をむかえる。

「神父様、なぜ神父様は正田のもとからいなくなってしまったのですか。正田は悲しゅうございます。あの、神父さまのおことば。今は、神父様のおっしゃった木々や小鳥の姿が、独房の窓から見えるだけでも希望が持てなくなります。私はいったい何をして、これからどうすればよいのか、神父様、どうかもう一度、あのすばらしい笑顔で、問いかけていただきたく…。悲しゅうございます。」

しかしカンドウ神父の死を乗り越えて、正田さんは以前にも益して、神の御手に自らを委ねる日々を送ることとなるのである。明日、今日、死刑が執行されるかもしれないと、恐怖に慄く死刑囚たち。自らも同じ運命であるにもかかわらず、彼らの心に水と光を差し出そう、そんな決意をしたのであった。

正田さんは、東京巣鴨拘置所内で日本将棋連盟きっての人望家として知られる五十嵐豊一九段（故人）の協力を得た。自らが死刑囚として収監され、勿論、多くの死刑囚たちが収監されている、巣鴨拘置所に「すがも将棋会所」を結成したのである。

己が将棋に興味を持ったのもさることながら、『いつ処刑の日が訪れるのか』という不安に苛まれ続けている、仲間の収監者に対しての『不安解消のためのオアシス』の意味も多分にあったのである。最高裁の判決を待っている、その最中、正田さんは、五十嵐さんに「すがも将棋会所は、有力メンバーがひとり抜けてさびしくなりました…」という書簡を送っている。この言葉の裏には、処刑台の露と消えた仲間への愛惜が頓にあふれている。死刑執行は、突然やってくる。なんの前ぶれもなしに、その朝自分の独房の前で止まった看守の足音で全てが決まる。その恐怖とたたかう死刑囚への「サハラの水」、それが「すがも将棋会所」であった。

それから、最高裁で死刑判決が確定し、五十嵐さんに最後に送った書簡には正田さんの次のような言葉があった。

「（将棋）二段の免状をいただき、本当に嬉しく驚きです。五十嵐先生のお優しい心をすぐに母と弁護士の正木先生に伝えて、一緒に喜んでいただくつもりです。死刑が確定して、いろいろつらいことが重なり、少し心の晴れぬ毎日が続いておりましたが、先生のおかげでしみじみとした幸福を感じる事ができましたことを心からお礼申し上げます。」書簡には、正田さんの大好きなエジプトの『女神マアトをあらわした金板』の絵が同封されていた。

生前五十嵐さんは、「おかしな罪は罪として、立派なキリスト者となった彼をなぜ処刑したのでしょうか。」と、機会あるごとに人に話されていた。



裁判で論告求刑を聞き入る正田さん

ついに死刑執行

1969年12月9日、正田昭さんの死刑が執行された。正田さんの霊名を私は知らないが、その回心はパウロのようであり、その頑健な意志はペトロのようであり、死に殉じるその透明感は、さながらステファノのようである。

多くの死刑囚がその死に直面したときには、希代の犯罪者も悪あがきをし、その姿態はまた刑務官のやるせない想いを誘う。個人的な怨みもない死刑囚の刑を任務として執行する刑務官たちの苦悩も、並大抵ではない。正田さんは死へ赴くさい、刑務官たちを逆に労ったという。その立派な態度は、後々刑務官たちの語り草となったそうである。

正田さんは作家としても卓越した描写力を持っていた。「サハラの水」を始め、「黙想ノート」など本職の小説家が驚くほどの秀作を独房から世に送り出した。全ての印税は、被害者の家族に贈ったそうである。死刑執行のときの断末魔、その瞬間の神への祈り、それは私へのキリスト者としての、かけがえのない彼からのメッセージである。

正田さんは確かに憎むべく殺人犯であり、被害者の方の憤りは、至極もつともである。私は殺人事件の被害者になったことは無論ない。私があればこれというのは、論外である。「光市母子殺人事件」を例にとれば、論争も判かる。けれど人が人の死を、人の死をもって裁くことに私は反対である。聖マリア・ゴレッティの母は娘を辱めた男が釈放されたとき、夕食をご馳走しようといった。娘を殺された、「小松川事件」の被害者の両親は、犯人（冤罪の可能性もあったが）を釈放後、自分の会社で雇いたいといった。これらの意味をもう一度、考えてみたい。 *参考 「宣告」加賀 乙彦「将棋とっておきの話」山本 享介「黙想ノート」正田 昭

